日本人にとって美しさとは何か ⑵

例えば、「古池や蛙飛びこむ水の音」という一句は、「古池」や「蛙」が美しいと言っているわけではなく、もちろん「水の音」が※妙音だと主張しているのでもない。ただ古い池に蛙が飛びこんだその一瞬、そこに生じる緊張感を孕んだ深い静寂の世界に芭蕉はそれまでにない新しい美を見出した。そこには何の実体物もなく、あるのはただ状況だけなのである。

日本人の①このような美意識を最もよく示す例の一つは、「春は曙、やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて……」という文章で知られる『枕草子』冒頭の段であろう。これは春夏秋冬それぞれの季節の最も美しい姿を鋭敏な感覚で捉えた、いわば模範的な「状況の美」の世界である。すなわち春ならば夜明け、夏は夜、そして秋は夕暮というわけだが、その秋について、清少納言は次のように述べている。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし……。

これはまさしく「夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところ」というあの現代人の美意識にそのままつながる感覚と言ってよいであろう。日本人の感性は、千年の時を隔ててもなお変わらずに生き続けている。

「実体の美」は、そのもの自体が美を表わしているのだから、状況がどう変わろうと、いつでも、どこでも「美」であり得る。《ミロのヴィーナス》は、紀元前一世紀にギリシャの植民地であった地中海のある島で造られたが、二一世紀の今日、パリのルーヴル美術館に並べられていてもその美しさに変わりはない。②仮に砂漠のなかにぽつんと置かれても、同じように「美」を主張するであろう。だが「状況の美」は、状況が変われば当然消えてしまう。春の曙や秋の夕暮れの美しさは、長くは続かない。状況の美に敏感に反応する日本人は、それゆえにまた、美とは※万古不易のものではなく、うつろいやすいもの、はかないものという感覚を育てて来た。うつろいやすいものであるがゆえに、いっそう貴重で、いっそう愛すべきものという感覚である。③日本人が、春の花見、秋の月見などの季節ごとの美の鑑賞を、年中行事として特に好んで今でも繰り返しているのも、そのためであろう。

実際、清少納言が的確に見抜いたように、日本人にとっての美とは、季節の移り変わりや時間の流れなど、自然の営みと密接に結びついている。

（高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』筑摩書房　による）

※妙音…非常に美しい音。　万古不易…いつまでも変わらないこと。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「このような美意識」とはどのようなものか。適当なものを選びなさい。

ア 「美」はそれまであったものにではなく、常に新しいものに見出されるのだという意識。

イ 「美」は、何らかの実体物を指すというよりも、ある状況に表れるのだという意識。

ウ 「美」とは失われやすいものであり、緊張感をもって捉えなければならないという意識。

〔　　〕

(2) ——線②「仮に砂漠のなかに……主張するであろう」とあるが、これについて本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「実体の美」はそのもの自体が美を表現しているので、砂漠のなかにあっても表現される「美」は変わらない。

イ 「実体の美」は紀元前から今日まで続くものなので、砂漠のなかにあっても壊れにくいのだと考えられる。

ウ 「実体の美」は西欧において生まれたものなので、砂漠のなかにあっても似つかわしいものだと感じられる。

〔　　〕

(3) ——線③「日本人が、……そのためであろう」とあるが、ここで筆者が述べようとしている内容として適当なものを選びなさい。

ア 日本人にとって美ははかないものであるため、繰り返される行事のように長く続くものを貴重だと感じる。

イ 春や秋は千年の昔から変わらず日本人に愛されるものであり、夏や冬よりも日本で好まれている。

ウ 季節ごとの美は長く続かないものであり、だからこそ貴重なものとして日本人に好まれている。

〔　　〕